

カリブ社会のグローバル化とグローカル化

—トリニダードのカーニバルを事例に—

The Caribbean society in the 21st century: Globalisation and glocalisation

—A case in the carnival in Trinidad—

伊藤 みちる¹

¹大妻女子大学国際センター

Michiru Ito¹

¹International Center, Otsuma Women's University

12 Sanban-cho, Chiyoda-ku, Tokyo, Japan 102-8357

キーワード：トリニダード，カーニバル，グローバル化，グローカル化

Key words : Trinidad, Carnival, Globalisation, Glocalisation

抄録

世界3大カーニバルのうちの一つと謳われ、カリブ海最南端のトリニダード・トバゴ共和国の首都ポート・オブ・スペインで行われるカーニバルのパレードは、近年世界各地から参加者を迎え、国を挙げての一大イベントとなっている。一方で、カーニバル時期には国外からの観光客が激増し、街は賑わいを見せ、経済的には潤うものの、それに起因する交通渋滞や街の混雑はトリニダード・トバゴ国民の日常生活に支障を来している。さらにカーニバルのパレード参加費用高騰や治安悪化も相俟って、トリニダード・トバゴ国民はカーニバルという饗宴の周縁へ追いやられている。他方でトリニダードのカーニバルは、トリニダード・トバゴを含めたカリブ海地域のカーニバルとして、カリブ海市民や欧米に住むディアスポラたちにとっては、自らのルーツやアイデンティティを再認識するための故郷のお祭りとなっている。したがってトリニダードのカーニバルは、開催国であるトリニダード・トバゴからの参加者は減少する一方ではあるが、カリブ海地域全体の文化的な繋がりを強化し再認識させ、カリブ海市民としてのアイデンティティの共有と強化を促進するであろう。

1. はじめに

本稿は、トリニダード・トバゴ共和国の首都ポート・オブ・スペインにおいて、カトリック暦の「灰の水曜日」の前々日より行われる仮装パレードを「トリニダードのカーニバル」と呼び、その周縁からグローバル化とグローカル化などによる社会の変遷を見ていく。一部の先行研究においては、トリニダードのカーニバルは、トリニダード・トバゴ国民のナショナル・アイデンティティを強化し、またナショナル・アイデンティティとして国民に共有されているとされてきた^[1]。他方では、トリニダードのカーニバルは、トリニダード・トバゴ政府が政策として、国としてのイメージ構築や観光客誘致のために、首都ポート・オブ・スペインの中上流階級以上の人々の文化を対外的に商品

化し伝統化したものであり、決してすべての国民が共有している文化ではないとする先行研究も存在している^[2]。

イギリスから独立した1963年以降は、欧米各地への移住、出稼ぎ、留学など、トリニダードから人が流出し続けている^[3]。さらに近年は、近隣カリブ諸国、中南米諸国、中国、フィリピン、インドなどのアジア諸国から、トリニダードに絶えず人が流入してきている^[4]。地球規模で、人とそれに伴うモノの移動が盛んになり、21世紀現在のトリニダードのカーニバルは、トリニダードで行われるカーニバルではあるが、トリニダード在住のトリニダード人の参加が極端に少なくなっている^[5]。その状況から、トリニダード人のためのカーニバルを取り戻そうとする動きが出てきている。

同時に、トリニダードのカーニバル文化に近いものを共有するバルバドスなどの東カリブ諸国においては、トリニダードを含むカリブ海地域における「カリブ海市民」としてのアイデンティティが共有されてきている。

本稿では、報告者が現地で体験した2007年から2018年まで、12回にわたるトリニダードのカーニバルから見えた、カリブ社会の変遷について現地情勢を中心に報告する。

2. トリニダードについて

カリブ海最南端のトリニダードは、1498年にコロンブスの第3回航海で「発見」されてスペイン領土となったものの、約300年も植民地として開拓されずに放置されていた。そのため1772年にはスペイン人入植者326人と先住民417人しか確認できないほどであった^[6]。しかしスペインは、当時東カリブ諸島において存在感を増していたイギリスに対抗するため、1783年にはヨーロッパのカトリック同盟国からトリニダードへの移民を募集した。そこにフランス革命で混乱するフランス本土やマルティニークやグアドループなどフランス領カリブ諸島から、フランス王党派貴族158世帯が大挙してトリニダードに移住してきた^[7]。無償で広大な土地を与えられ、移住当初からプランテーション経営を行って莫大な財を成し、トリニダードに着実に定着していった彼らこそが、トリニダードにカーニバルの習慣を持ち込んだといわれている^[8]。

1802年にフランス革命の講和条約「アミアンの和約」により公式にイギリス領となったトリニダードは、砂糖やカカオのプランテーションへの労働力として、アフリカ人奴隷、インドや中国からの年期契約労働者、マデイラやコルシカなどヨーロッパからの農業移民を導入した。19世紀後半には、シリア・レバノンからオスマントルコによる宗教迫害を逃れてきた商人も移住してきた。その結果、1962年にイギリスから独立する頃には、植民地の支配層であるヨーロッパ系市民を絶対的少数派とする多民族・多文化共生社会が誕生していた^[9]。

2011年現在のトリニダードの人口は約133万人であり、その構成は以下のとおりである^[10]。

- ・インド系：37.01%
- ・アフリカ系：31.76%

- ・混血（インド系＋アフリカ系）：7.83%
- ・混血：15.69%
- ・ヨーロッパ系：0.7%
- ・中国系：0.31%
- ・シリア・レバノン系：0.08%

またトリニダード・トバゴにおける主な宗教とその人口の割合は以下のとおりである^[11]。

- ・カトリック：21.6%
- ・ヒンドゥー：18.2%
- ・英国国教会：5.7%
- ・イスラム：5.0%

なおトリニダード・トバゴを構成するトリニダード島とトバゴ島は、植民地史が異なるため、人口構成が異なり、そのため文化も異なる。本稿では、「トリニダードのカーニバル」が開催されるトリニダード島のみ注目する。

3. 「トリニダードのカーニバル」

3.1. 歴史

カーニバル時期にマスクを顔につけ邸宅で仮面舞踏会を行う習慣は、1783年頃よりトリニダードに移住してきたフランス系市民が移住直後より行っていたとされ、他のヨーロッパ系市民も徐々に参加し始めたと記録されている^[12]。当時、アフリカ人奴隷はあらゆるカーニバル行事に参加することを法律で禁止されていたほか、年期契約労働者などの非ヨーロッパ系市民もカーニバル行事へは制限付きの参加しかできなかった^[13]。しかし街を練り歩くパレードについては、1833年のカーニバル時期に、「仮面をした下流階級の間人が、安息日を破り、日曜日に路上で大騒ぎをすること」を阻止しようとするピーク警察副署長の試みについての新聞記事^[14]として記録されている。この試みは、この「大騒ぎ」の参加者が更なる大騒ぎを起し、暴動に発展し、しまいには同警察副署長の自宅が襲撃されたと報道されている。さらにトリニダードにおいて実質的な奴隷制が完全に廃止された1838年の翌年、1839年から1881年のカーニバルは、トリニダードのカーニバル史上、最も暴力的だったという。抑圧された日々のうっぷんを晴らすため暴力的な違法行為を行う際、仮面をつけるカーニバル時期は、素性を隠して暴れまわる絶好の機会だったからである。

上記のように、1838年のトリニダードにおける実質的な奴隷解放から100年以上の間、トリニダードには2種類のカーニバルが同時に存在していた^[15]。つまり植民地の支配者層であるヨーロッパ系市民が邸宅で行う豪華な仮面舞踏会と、元奴隷などの非ヨーロッパ系労働者が路上で仮面をつけて行う賑やかなパレードである。しかし次第にヨーロッパ系市民は、場所を邸宅から路上に移し、仮面をつけて街に繰り出すようになった。しかし、山車の上に乗って街をパレードすることで、非ヨーロッパ系市民と明確な一線を引いた。

1950年半ばまで続いたこの2種類のカーニバルは、60年代までに非ヨーロッパ系市民にも中上流階級が誕生し、彼らも山車を用いるようになったことで、カーニバルのパレード形式の統一は達成した^[16]。しかし、パレード参加者がどの山車のグループに所属するかという選択は、植民地時代に構築された肌の色に応じた社会階級が大きな役割を果たしてきた^[17]。下層階級以下の非ヨーロッパ系市民は、パレードには参加せず、勝てば多額の賞金が稼げるスチールパンの演奏大会「パノラマ」に参加するか、パレードの山車の飾り付けや、パレードに参加するマスカレーダーの衣装作りなど、裏方の役割に徹した。このように、「トリニダードのカーニバル」のパレードへの参加は、実質的に山車に乗ることのできる経済力を持った中上流階級以上の市民に限られていた。

加えて、すべてのトリニダード市民がカーニバルのパレードに参加を希望するわけではなかった。例えば、敬虔なヒンドゥー教徒やイスラム教徒にとっては、昔も今もカーニバルの享楽は自らと全く関係のないことである。また地方に住む者にとっては、首都で行われるパレードを見物しに行くための移動手段の手配やその交通費も大きな問題であり、自分たちとは別世界に住む人たちのお祭りだという感覚の方が強かった^[18]。さらには、たとえ首都に住んでいても、カーニバルのパレードに参加するための衣装代やその他の経費は高額になるため、現実的に参加が可能な人は限られていた。それが世界で初めてトリニダードの銀行がカーニバル・ローン融資を始めた所以である^[19]。

カーニバルをビジネスの機会として捉える市民もいた。特にシリア・レバノン系市民は、19世紀後半にトリニダードに移住した直後から布地の商人として商売を展開しており、社会交流が盛んに

なるカーニバルの時期に衣服を新調する顧客や、カーニバル・パレードのための衣装を作成する顧客などが布地を大量に購入するカーニバルはまさに稼ぎ時であった。現在でもシリア・レバノン系市民は昔ながらに布地を売り続けている一方で、中国やインドに強い繋がりを持つ中国系市民やインド系市民は、トリニダードと比較して衣装パーツ入手が簡単で、モノが豊かで、衣装を制作する工員が圧倒的に多い中国やインド、バングラデッシュの工場で、大量のカーニバル衣装を受注するバンドのために縫製を請け負っている。大量生産した衣装と、合わせて履くブーツ、化粧品、小物なども、コンテナで中国やインドから大量に輸入し、カーニバルのためには出費を厭わない中上流階級を相手に商売をしている。

3.2. 現代の「トリニダードのカーニバル」

クリスマス翌日のボクシング・デーからカーニバルのシーズンが始まるトリニダードでは、カトリック暦にならば、毎年「灰の水曜日」の直前の月・火曜日に仮装をして街を練り歩くパレードがカーニバル・シーズンのしめくくりとして行われる。本稿では、このパレードを「トリニダードのカーニバル」と呼ぶ。カーニバルのシーズンには、このパレードが行われる前に、前述のスチールパンの演奏大会「パノラマ」や、カリプソ、ソカ、チャットニーなどの音楽コンテストなどが開催される。

パレードは、肌の露出が高い羽根やビーズで飾り付けられた豪華できらびやかな衣装を着たマスカレーダーによる「プリティ・マス」が注目を集めるが、それだけではない。子どもの仮装パレード「キディズ・マス」や、「パノラマ」を終えたスチールパンのバンドもパレードに参加する。アフリカに起源を持つ民俗キャラクターや、それがカリブ海の文化コンテクストで独自の発展を遂げたキャラクターに扮したマスカレーダーによる「トラディショナル・マス」もしくは「オール・マス（“Ole Mas”=Old Mas）」と呼ばれるものもある。

その中でも特に「ベイビー・ドール」^[20]は、かなりシュールなキャラクターである。アフリカ系の女性がヨーロッパ系白人との混血であると思わせる肌の色をした赤ちゃんの人形を抱きながら、道ばたでパレードを観覧している男性に父親として責任を取るよう問い詰める。また「ジャブ・モラ

ッシー」^[21]は、フレンチ・パトロ語で悪魔を意味する *Jab* と、糖蜜を意味する *Molassie* から成るキャラクターであり、現在最も人気がある。糖蜜に似せたタールや様々な塗料を全身に塗りたくり、ビスケット缶を打ち鳴らしながら、首を鎖につながれた状態で、パレードの観客に金銭を要求する。これはサトウキビ・プランテーションで火事が起こったとき、鎖につながれた奴隷の周囲でサトウキビが燃え、ススに全身が覆われた姿を真似したキャラクターだと言われている^[22]。

トリニダード島とトバゴ島で構成されるトリニダード・トバゴでは、首都ポート・オブ・スペインでカーニバルが行われる同日、トリニダード島中部のチャグアナスやクーバなど数箇所で、小規模なパレードが行われている。同様にトバゴ島でも小規模なパレードが行われている。このようにトリニダード・トバゴにおいては、同日に数箇所でカーニバルのパレードが行われているが、トリニダード・トバゴ政府が観光資源として売り出したり、先行研究で「トリニダード・トバゴのカーニバル」として扱われたりしているのは、首都ポート・オブ・スペインで開催されるパレードのことである。

カーニバルのパレード参加者である mascarader は、バンドと呼ばれるグループに属し、毎年新しくなる揃いの衣装を着る必要がある。2017年のカーニバルにおいては、女性用の衣装は安いもので 500 米ドル、高いものでは 4500 米ドル以上した。またインディビジュアルと呼ばれる細部にわたる注文が可能なオーダーメイドの衣装となると価格に上限はなく、著者の知人は 8000 米ドルを 2 日間だけ有効な衣装のために支払っていた。最低賃金が時給 2.5 米ドル^[23]の今日のトリニダードにおいて、衣装を着てカーニバルに参加することは、かなり経済的に豊かでないと不可能である。

2017 年に公式に登録されていた 21 のカーニバルのバンドは、その多くが十数台の 10 トン・トラックから構成されていた。巨大なスピーカーを搭載したもの、ビールやラムなどの酒類やソフトドリンクを搭載したもの、簡易トイレを積んだもの、看護師が待機する医療チームのものなどである。それらの 10 トン・トラックと色とりどりの衣装を着た数百人から二千人程度の mascarader から構成される 21 のバンドが同日に街をパレードするのである。圧巻の一言である。

参加 mascarader 数は、バンドにより多少の

差はあるが、各バンドは約 100 人の警備員を雇用し、路上の一般見物客が mascarader と接触することを最小限に保っている。カーニバル当日にバンド直属の警備員として働くのは、現役の警官や軍人、またその退職者である。彼らは臨時収入を得るため、パレードが行われる 2 日間のために休暇を取得する。バンドの各トラックで、飲み物を mascarader に渡し、トイレを mascarader のために掃除する労働者たちは、経済的また社会的にカーニバルのパレードに衣装を着て参加はできないが、憧れのカーニバルのパレードに間接的に参加を希望する人々である。

3.3. 「トリニダードのカーニバル」の変化

2007 年から 2018 年まで、12 回のカーニバルを通じて報告者が気づいた点は以下のとおりである。

(1) mascarader のグローバル化

トリニダードのカーニバルに参加するのは、必ずしもトリニダード・トバゴ国民だけではない。現在は、世界各地からの観光客や、トリニダードから世界各地に移住したディアスポラやその 2, 3 世が中心となっている^[24]。観光客の主な出身地は、米国、英国、近隣カリブ海諸国、ドイツ、スウェーデン、日本などである。また参加者の国際化を受け、カーニバルの観光商品としての価値を上げるための試みは、カーニバル当日のサービス内容の向上に繋がっている。そしてそれに伴って、さらにカーニバルのパレードに参加するための費用が高騰している。

2000 年頃から、「トリニダードのカーニバル」は、トリニダードからの移住者が多く住む北米や英国以外にも商品として輸出されており、ベルリン^[25]やストックホルム^[26]、チューリッヒ^[27]やロッテルダム^[28]など世界各地でトリニダードのカーニバル風のイベントが開催されている。そこで関心が高まり、本場のトリニダードのカーニバルに参加するためにトリニダードを訪れる観光客が増えてきている。

(2) トリニダード人の不参加

カーニバルのパレード参加費の高騰を受け、一般トリニダード人にとって、カーニバルのパレードへの参加は非現実的なものとなっている。カーニバルのパレードへの参加をめぐり、参加者と不

参加者との経済力の格差がより明らかになったことで、カーニバルの時期には参加者に対する強盗被害が頻繁に発生するようになった。また組織的な強盗も見られるようになり、ギャングによる活動資金調達のための強盗や、強盗を行う地域の支配をめぐるギャング同士の抗争も盛んになっている。

さらにカーニバルのパレードに参加するためにトリニダードを訪れる観光客の増加に伴い、カーニバル時期の異常な交通渋滞はトリニダード人の日常生活に支障を与えている。この街の混雑と上記のような治安の悪化の影響を避けるため、カーニバル時期には国外に脱出するトリニダード在住者も少なくない。

かつてよりカーニバルのパレードには不参加であった敬虔なイスラム教徒やヒンドゥー教徒のトリニダード人も、カーニバルの音楽や衣装が近年さらに性的に扇動的なものになってきたため、「騒音」や「騒動」から逃れるため、国外に脱出したり、トリニダードの地方に旅行に出かけたりしている。他方、カーニバルのパレードの爆音や嬌声が聞こえる街中のモスクで、日常と変わらず祈りを捧げるイスラム教徒もいる。彼らにとってカーニバルは、今も昔も自らとはまったく関係のない行事であり続けている。

(3) カーニバルの衣装の簡略化と高級化

かつてはカーニバルの衣装デザイナーはトリニダード人に限られ、決められたテーマの中で創造性を発揮し、独創的なデザインの衣装を発表してきた。しかし昨今はデザイン性が乏しい、ビキニに羽根とビーズを貼り付けただけのような衣装が主流となってきている^[29]。それにも関わらず、衣装の価格は上昇の一途を辿っている。カーニバルのパレードが行われる月曜日の午後と火曜日の2日間のみだけのために、月収以上の値札が付いた衣装代を支払うことができる経済力を持つトリニダード人は非常に限られている。

他のバンドより一足早く海外市場に目を向けたことで有名な「トライブ (Tribe)」の代表ディーン・アキン氏は、創作性が低いとされるビキニ・タイプの衣装がカーニバルの伝統を壊すと批判されていることは承知しているが、そういった様式の衣装を好むのはパレードに参加するマスカレーダーたちであること、また伝統は過去の様式を踏襲する

だけではなく、新しく作っていくものであるとの考えを示した^[30]。

そうして発売日に売り切れる衣装を提供してきたトライブは、2016年には現代風のビキニ・タイプに加えて伝統とデザイン性を兼ねそろえた衣装を売り出す新たなバンド「ロスト・トライブ (Lost Tribe)」を立ち上げた^[31]。衣装の最低価格は約800米ドルであるが、そのラインナップは他のバンドとは明らかに異なるデザインで、伝統を意識した物語性があり、なおかつパレード当日に最も目立つユニークさと豪華な華やかさを持ち合わせている。

(4) カーニバルの衣装制作の外注と大量生産

トリニダード人のカーニバル衣装デザイナーがデザインした衣装を、トリニダード島内でトリニダード人が縫製することは少なくなった。現在では、衣装のすべてのパーツをトリニダードで縫製しているバンドはなくなった。現在、多くのカーニバル衣装は、中国、インド、バングラデッシュなどの工場で大量生産されている^[32]。2008年に一部のバンドが外国の工場で衣装を大量生産していると大事件のように報道がされたときには、これらのバンドに対するボイコットが呼びかけられたが、実際には、多くのバンドが外国で衣装の大量生産を行ってきている^[33]。今でさえ高額な衣装の価格を保つには、できるだけ人件費と原材料費の安い国の工場に縫製を外注して大量生産するしか方法がない。その点については、カーニバルを作る側としては衣装縫製の仕事が外国に流出してしまうし、技術と伝統の継承の機会が失われるという面からも決して肯定できる状況ではない。しかしカーニバルの完全な商業化が進んだ昨今、カーニバルをビジネスとして行っているバンド経営者は、トリニダードで縫製を行うという選択はもうできないであろう。

トリニダードのカーニバル・バンドの中でもパーティー好きの中上流階級以上のアフリカ系参加者が多いとされていた「アイランド・ピープル・マス (Island People Mas)」(2018年現在は休業中)のルイス代表や衣装部門担当のニールソン氏は、カーニバルの衣装のパーツを輸入する関税が高額であることと、トリニダードでは、細工技術とデザイン通りに納期を守って仕上げるという高いプロ意識を持たない衣装制作者が多くなってきたこと

から、国内で衣装製作をする選択肢はないとしている。さらに20以上のバンドがそれぞれ数千着の衣装を用意しなければいけない状況を鑑みると、国内での衣装製作は現実的でないと発言した^[34]。

(5) グローバル化するカーニバル^[35]

トリニダードから世界各地に移住したディアスポラのネットワークは拡大する一方で、世界各地に広がる。そのディアスポラを通じてカーニバル文化は広く紹介されている。カーニバル当日に10トン・トラックにターンテーブルを載せ、マスカレーダーの反応を見ながら音楽を選曲することは、今でもトリニダードのすべてのDJの夢である。また2010年頃までは海外から訪れたDJはトラックに乗ることさえ許されなかった。しかし現在は、トリニダード人のDJよりも、ニューヨーク、ロサンゼルス、ロンドン、マイアミ、東京などから、カーニバルのためにトリニダードに渡るDJが中心となり、カーニバル当日の音楽が選曲されている^[36]。

カーニバルのバンドの後援事業も、かつてはトリニダード企業の独占であった。ところが2008年に米国で起きたリーマンショックの波が2009年後半にトリニダードに到達すると、後援を希望するトリニダード企業が減り始め、2012年にはカーニバルのバンドの多くがトリニダードの後援企業からの支援不足のため運営不信に陥った^[37]。

その状況を打開したのが外資系企業である。2013年には、カーニバル時期に行われたパーティーにジャマイカのラム「アップルトン」が外国企業として初めてトリニダードのカーニバル事業の後援企業となった。2014年にはカーニバルのバンドの後援として、ジャマイカの「アップルトン」やバルバドスの「マウントゲイ」などのラムのブランドが外国企業として初めて後援に名を連ね、翌年にはガイアナの「エルドラド」も後援事業を始めた。「バドワイザー」や「クアーズ」などの米国のビールや、ドミニカ共和国のビール「プレジデント」も後援事業に参加し、2017年にはメキシコのテキーラ「パトロン」までもが後援企業として参加を始めている。このようにカーニバルのバンド後援事業は、もはやトリニダード企業の独占ではなくなったが、パーティーやバンド運営は比較的順調である。

さらには世界的な化粧品メーカーの「マック

(M・A・C)」も2018年からカーニバル・バンドの後援を始めた^[38]。マックに後援されているバンドに参加すると、パレード前にパレード用のメイク講習が受けられたりする。以前は、トリニダードの化粧品メーカー「サーシャ(Sasha)」が多くのバンドを後援をしていたが、近年は後援バンド数が減少している。トリニダードのドメスティックな化粧品メーカーよりも、高級感あふれる世界的な化粧品メーカーに後援されている方が、マスカレーダーにとって嬉しいことは確かである。

(6) ローカル化の失敗

トリニダード人によるトリニダード人のためのトリニダードのカーニバルを守るために、外国人がトリニダードのカーニバルに参加することを防止する手段は今までにいくつか試行されてきた。例えば、トリニダード在住のトリニダード人のみしかバンドに参加登録できないシステムが導入されたりした。しかし結局のところ、商業化したカーニバルにとって、経済的な観点からみると、参加者の国籍や背景よりも、購買力の方が重要であるほか、参加者を選別することは、一部の人を差別することに繋がるため、植民地時代から肌の色などを理由に差別されてきた歴史を持つ多くのトリニダード人はカーニバルのパレード参加者を選択することについて批判的であった。

さらにバンドにおけるすべてをトリニダードの人・モノでつくる試みがあったが、今のところすべて失敗に終わっている。そもそも「トリニダードの人」は世界各地からの移住者で成り立っており、現在まで、すべてのトリニダード人に共有されるアイデンティティの構築は成功したことがない。また優秀な人の多くは欧米へ移住してしまう現実があり、同時にカリブ海地域における人・モノが盛んに行き交っている昨今、「トリニダードの人」また「トリニダードのモノ」の定義が難しくなっている。

4. おわりに

1783年からフランスからの移民によりトリニダードに持ち込まれたカーニバルの習慣は、世界のグローバル化の影響を受け、2017年現在、当時とはまったく異なる形態となり、一部のトリニダード人や世界各地からの観光客のための年に一度のお祭りとなっている。伝統的にはカトリックの、

現在では性的に扇動的で、参加するために高額な費用がかかるトリニダードのカーニバルのパレードは、トリニダードの多民族・多文化共生社会においては参加者が限られるため、トリニダード・トバゴのナショナル・アイデンティティを強化しているとは言えず、ナショナル・アイデンティティとしても共有されていない。

さらにトリニダード人のためのトリニダード人によるトリニダードのカーニバルをつくるというローカル化の試みは、トリニダード人の社会階級、経済力、宗教などの様々な社会要因や、完全に商業化してしまったカーニバルの現状があるため、21世紀現在のグローバル化された社会においては成功していない。他方で、グローバル化により、トリニダードのカーニバルは世界的なイベントとなり、世界三大カーニバルの一つに数えられるようになった。とはいえ、世界各地に広がるディアスポラにとっては、懐かしい故郷のお祭りとして認識されているため、自らのルーツを再認識し、アイデンティティを確認できるものとなっているようである。そして北米やヨーロッパなどの移住先において、西インド諸島市民としてトリニダード出身者とアイデンティティを共有する近隣カリブ海諸国出身者たちは、自らの出身国にカーニバルが存在しても、出身国との繋がり強度によっては、世界的な規模のトリニダードのカーニバルを西インド諸島のアイデンティティとして認識しているようである。

人とモノの移動がさらに盛んになることで、トリニダードのカーニバルは次第に更なる変化を遂げられると思われる。その変化により、トリニダードのカーニバルが大部分のトリニダード人から離れていく可能性は否定できない。その代わりに、トリニダードのカーニバルは、カリブのカーニバル、西インド諸島のカーニバルとして、さらに多くの観光客を呼び寄せる可能性を十分に有している。さらにトリニダードのカーニバルは、トリニダード社会だけでなく広くカリブ社会の文化的な繋がりを強化し、それを再認識させる素質を持ち合わせているため、カリブ海市民のアイデンティティの共有と強化を促進する存在となるであろう。

謝辞

本研究は MEXT 科研費 JP17K02034 と大妻女子大学戦略的個人研究費 (S2915) との助成を受けたものです。

付記

本稿は日本ラテンアメリカ学会大 38 回定期大会で発表を行った報告ペーパーに対し大幅に加筆・修正し情報の更新を行ったものです。

引用文献

- [1] Liverpool, Hollis. *Rituals of Power and Rebellion*. Chicago, Research Associates School Times Publications, 2001.
- [2] Chang, Carlisle. "Chinese in Trinidad Carnival". *TDR (1988-)*. 1998. 42(3), pp. 213-219.
Grant, Trevor. *Carnivalists: the Conflicting Discourse of Carnival*. New York: Yacos. 2014.
Scher, Phillip. "The Devil and the Bed-Wetter: Carnival, Memory, National Culture, and Post-Colonial Consciousness in Trinidad". *Western Folklore*. 2007. 66(1/2), pp.107-126.
- [3] International Organization for Migration. "New research analyzes impact of migration in Trinidad and Tobago". Posted: January 24, 2014.
<https://www.iom.int/news/new-research-analyzes-impact-migration-trinidad-and-tobago> (accessed 2018-11-24).
- [4] Mahabir, Raghunath. "Migration of Skilled Personnel in the CSME: The Case of Trinidad & Tobago". Conference Paper submitted to Sir Arthur Lewis Institute of Social and Economic Studies, The University of the West Indies. Conference title "Crises, Chaos and Change: Caribbean Development Challenges in the 21st Century". February 11, 2006.
ABS.CBN News. "Filipino health workers wanted in Trinidad and Tobago". February 24, 2014.
<https://news.abs-cbn.com/global-filipino/02/24/14/filipino-health-workers-wanted-trinidad-and-tobago> (accessed 2018-11-24)
Scruggs, Gregory. "Venezuelans fleeing to Trinidad expose cracks in island refugee policy". *Reuters*. July 23, 2018.
<https://www.reuters.com/article/us-islands-trinidad>

- dtobago-refugees/venezuelans-fleeing-to-trinidad-expose-cracks-in-island-refugee-policy-idUSKBN1KD0U6 (accessed 2018-11-24)
- [5] Daly, Martin. "Divided masquerade: Trinidad Carnival is increasingly a 'minority sport'". February 14, 2016. *Wired 868*.
<https://wired868.com/2016/02/14/divided-masquerade-trinidad-carnival-is-increasingly-a-minority-sport/> (accessed 2018-12-8)
- [6] Williams, Eric. *History of the People of Trinidad and Tobago*. A&B Publishers, 1942.
- [7] De Verteuil, Anthony. *Trinidad's French Legacy*. Trinidad, Litho Press.
- [8] De Verteuil, 2010.
- [9] Segal, Daniel A. "'Race' and 'colour' in pre-independence Trinidad and Tobago". Kevin Yelvington (ed.) *Trinidad Ethnicity*. London, MacMillan. pp. 81-115.
- [10] Central Statistical Office. The Republic of Trinidad and Tobago. "2011 Population and Housing Census".
- [11] Ibid.
- [12] Anthony, Michael. *The Carnivals of Trinidad and Tobago: From Inception to Year 2000*. Trinidad, Zenith, 2011.
- [13] Carr, Andrew. "Old Time Carnival". Gerard Besson and Bridget Brereton (eds.) *The Book of Trinidad*. Trinidad, Paria. pp.448-455.
- [14] Liverpool, 2001.
- [15] Anthony, 2011.
- [16] Anthony, 2011.
- [17] Anthony, 2011.
- [18] Sankeralli, Burton. "Indian Presence in Carnival". *TDR (1988-)*. 42(3), Trinidad and Tobago Carnival. Autumn, 1998, pp. 203-212.
- [19] Garth L. Green, Philip W. Scher, eds. *Trinidad Carnival: The Cultural Politics of a Transnational Festival*. Bloomington, Indiana University Press. 2007.
- [20] National Carnival Commission of Trinidad and Tobago. "Traditional Mas Characters-Baby Doll".
<https://web.archive.org/web/20160213020840/http://www.ncctt.org/new/index.php/carnival-history/trad-carnival-characters/335-traditional-mas-characters-baby-doll.html> (accessed 2018-12-7)
- [21] Traditional Mas Archive. "Jab Molassie"
<http://www.traditionalmas.com/project/jab-molassie/> (accessed 2018-12-7)
- [22] National Carnival Commission of Trinidad and Tobago. "Traditional Mas Characters - Jab Molassie".
<http://www.ncctt.org/new/index.php/about-ncc/departments/regional/trad-carnival-characters/312-traditional-mas-characters-jab-molassie.html> (accessed 2018-12-7)
- [23] Ministry of Labour and Small Enterprise Development. "Minimum Wages Board".
<https://www.molsed.gov.tt/index.php/key-relationships/minimum-wages-board> (accessed 2018-12-7)
- [24] Association of Caribbean States. "Carnival: When Culture Attracts Tourism". 2014.
<http://www.acs-aec.org/index.php?q=press-center/releases/2014/carnival-when-culture-attracts-tourism> (accessed 2018-11-24)
- [25] ベルリンのトリニダード風カーニバル・イベントの情報サイト
https://socaberlin.com/?fbclid=IwAR3534enGYnEjUcdkZYcZxa-z7Ni0-S0N6B-ASCwdB_WaYfmmB1-aoiWRkM (accessed 2018-11-24)
- [26] "WATCH: Soca takes over Sweden". *Loop*. May 16, 2017.
<http://www.looptt.com/content/watch-soca-takes-over-sweden> (accessed 2018-11-24)
- [27] チューリッヒのトリニダード風カーニバル・イベントの情報サイト
<https://www.swiss-soca-crew.ch/> (accessed 2018-11-24)
- [28] ロッテルダムスのトリニダード風カーニバル・イベントの情報サイト
<https://rotterdamunlimited.com/en/zomercarnaval> (accessed 2018-11-24)
- [29] Copeland, Raeden and Hodges, Nancy. "Exploring Masquerade Dress at Trinidad Carnival: Bikinis, Beads, and Feathers and the Emergence of the Popular Pretty Mas". *Clothing and Textiles Research Journal*. 2014. 32(3), pp. 186-201.
- [30] Eligon, John. "Carnival's Louder Commercial

- Beat Adds Dissonance”. March 9, 2011.
<https://www.nytimes.com/2011/03/09/world/americas/09trinidad.html> (accessed 2018-11-24)
- 2003年以前のカーニバル時期の凶悪犯罪については Grant, Trevor. “Carnival and Criminology in Trinidad and Tobago”. *Carnivalists: The Conflicting Discourse of Carnival*. Yacos Publications, New York. 2004. を参照.
- [31] “WATCH: Out & About with The Lost Tribe's Valmiki Maharaj”. *Loop*. February 21, 2017.
<http://www.looptt.com/content/watch-out-about-lost-tribes-valmiki-maharaj> (accessed 2018-12-8)
- [32] Elliott, Nneka. “The Blood, Sweat And Tears Of Carnival Costumes: It's all for the love of mas”.
https://www.huffingtonpost.ca/nneka-elliott/origin-s-of-the-carnival-costume_a_23066429/ (accessed 2018-12-7)
- [33] Downs, Keyna. “Carnival Made In China: Trinidad's Annual Festival Faces A Generational Divide”. November 24, 2015. *WLRN*.
<http://www.wlrn.org/post/carnival-made-china-trinidads-annual-festival-faces-generational-divide> (accessed 2018-12-8)
- [34] Seebaran, Desiree. “The changing face of Carnival”. *The Trinidad and Tobago Guardian*. February 12, 2012.
<http://www.guardian.co.tt/article-6.2.416083.fe8a2cea5f> (accessed 2018-12-8)
- [35] Nurse, Keith. “Globalization and Trinidad Carnival: Diaspora, Hybridity and Identity in Global Culture”. *Cultural Studies*. 1999. 13(4), pp.661-690.
- Allen, Ray. “Harlem Calypso and Brooklyn Soca: Caribbean Carnival music in the diaspora”. *Ethnic and Racial Studies*. 2018, pp. 1-18.
- Gugolati, Maica “Creation of an exportable culture: a cosmopolitan West Indian case”. *African and Black Diaspora: An International Journal*. 2018. 11(3), pp. 247-262.
- Watson, Danielle. “Defining power margins: a classification of power within the discourses of police and civilian in a crime ‘hotspot community’ in Northern Trinidad”. *Journal of Multicultural Discourses*. 2014. 9(3), pp. 227-250.
- McNeal, Meida. “Navigating the Cultural Marketplace: Negotiating the Folk in Trinidadian Performance”. *Latin American and Caribbean Ethnic Studies*. 2013. 8(1), pp. 43-75.
- Conway, Dennis and Potter, Robert B. “Transnational Urbanism in Port of Spain: Returning Middle-Class Urban Elites”. *Urban Geography*. 2012. 33(5), pp. 700-727.
- [36] 2016年のカーニバル時期には世界各国のDJが腕を競う“International Soca DJ Competition”が開催され、近隣カリブ諸国や欧米、日本から数多くのDJが参戦した。詳細は Campbell, Nigel. “T&T DJs to represent in International Soca DJ competition”. *The Trinidad and Tobago Guardian*. January 28, 2016.
<http://www.guardian.co.tt/article-6.2.350339.12c3831c66> (accessed 2018-12-7)
- [37] Oxford Business Group. *The Report: Trinidad & Tobago 2016*. London, Oxford Business Group.
- [38] Phillips, Ricqcolia. “M·A·C Cosmetics launches exclusive Carnival collection in Trinidad”. *Loop*. January 26, 2018.
<http://www.looptt.com/content/mac-cosmetics-launches-exclusive-carnival-collection-trinidad> (accessed 2018-12-7)

(受付日 : 2018年12月14日, 受理日 : 2018年12月28日)



伊藤 みちる (いとう みちる)

現職：大妻女子大学国際センター専任講師

専門は旧英領カリブ海地域におけるポストコロニアル社会問題。
在トリニダード・トバゴ日本国大使館専門調査員や駐ガイアナ国連機関プログラム・オフィサー等として、延べ10年間にわたるカリブ海地域駐在中に見聞した問題を中心に研究している。